



要は問題あり重氏の赤鶏一冊をもられているなりで重氏然はいたりではなるりで重氏を関山は一の島在をを配道制重氏のはまからのと表を眼がないなりで重氏然は山は一の島在をををしまればりでは、まっまをしました。まれればいまったでは、まったのと表見大ら重高の苗高鏡とは、はいまれれるから、大はをはいまったがは、まっては、まって、というでは、まったが、いったのでは、まったでは、まったのでは、まった。まったのでは、まったのでは、まったのでは、まったのでは、まったのでは、まったのでは、まったのでは、まったのでは、まったのでは、まったのでは、まったのでは、まったのでは、まったのでは、まったのでは、まったのでは、まったのでは、まったのでは、まったのでは、まったのでは、まったいでは、まったのでは、まったいでは、まったのでは、まったのでは、まった。まったんでは、まっ

寬改重修諸家語卷第五百六十

好的新信は信む

初行忠

傳內

世い古修判官的義の女から

沒島我福尼

重氏 道観 高倉官はなのときいあっ方人とう 島我法眼

あるちは感ありて赤色い平氏の旗,

用からとまち没の鶏もまうして衆鶏

す抽出ときいろよりはをあらるむ

とて平氏をあまい

ううしむらは衰勢

-8

107

つきてあ

7

めえて院の許前は街も出れをして

三は風失作在はいあり後里は便

より後置的内造氏と称出

すりはれるはちる事をえも彼地を去て

をそむきて肝病方はまるおちはの事はなればないとは、とれば類別的軍よう飲けの地で職をた

法為

重货 忠景 忠勝 忠我 忠俊 重勝 岳奉於 三方男つ 宫内少浦 官内少浦 国城古 **麦左来** 国城古

東記 重春 久八郎 きない 重新 重實 香等 島我又五即忠安,祖 久去夫 切おう義貞教死のはちは名を変して中真の房一直對左男のと称したも、軍 孟告出 或中の不图は他へいか建式の於新田義 園は盤なる 7月夜雪 伊候古 きえき

忠古

沿七郎

生日かりと

天文十六年九月波西のすをいて男忠宗康是薦忠卿は悪仕一三西國後軍を行ち 先祖中代语第二本家人大一思表清 う我死するおれをはこれわりま

者とも本様は電電」を今川物鹿垣を花 级特的传属大了收走一的一个了我这么 改る其ば门を攻破る首を獲るおと敢有 きな川家の部的雪無谋で伏去を改くた 我の接去等安博の博士、らむとせーと よりてり鏡をとり勇を励して奮い我ひ き思者をも一处国時の務兵五十三人 を分川の大き三方より校とうつけがと る三は國安博の特をはむ十一月八百尾 川義えら軍勢す今一て織国信意の電水 地をもつて忠去るまか十八年を内な れを流りうつ様を出て放りむとする

義えり指揮をらく時根彼をは久島土人 東照管的年十年の時 るけい日を你們は他一て教學しあてな 神を送りたてまりりまれの 館をりしらい常は三服をよいを耐省の 多了て忠去, 生君の送老す了である 用旅店は一て上下国籍もよのときるあ ちまをしてちょせしむといくともち資 つるおれるようてか そ一思去及ひれ平次 のなる忠去は乾て法事をもろる で熟意的たら一色的影人の智力 親上最雲一時漢等 时崎る元志十三年 即太男のをちをし 殿路府るあ

されるよう さきょ 安部大記え真あくをるつて国崎のは代 おとしく義元はきをあつりりたてよ 成もないたらせるないまていけんだい お花はを構へてはきるをたてまつらず る路府なおとむっせたまい義えち時 すかさくをいたり 東照客尾光國換回以所在 迎して語の島の地水 のわうるうていたいい国時はいらせる にておつらい信奮をもゆるりねさむ るとて三は国は代表を重石川右近東 いくかろからしてま かたきらはろくち

てあつる忠を進むてかるをあてゆきた 小けろのお奉ておれいけれを印へる らせるかかのとき同時はなるせるま てまつり山の家庭を用いて来教資財客 めるる幸なの事あるへうらやという 走動を励むーかかかちゃくかりた かもまむる一きはちるれいい からか事さらる制しあておいるるる及 いやう神なしたてあるまと肝弱あり (古れを感を弘治二年 竹事十五日か ふれいは事も出れるお薦くからせるは るましたかをあてさせるまりへきかる つ思し

我是多多小事天然之大的的许看量於方 あるもあってきまれいかちりょえきを もやけるいますよろ養育しあてまりき るをよのつるの人 いちいありと東あたておのるときる忠 もをおと教へるまかるそすべらるあ くるすべてあれいるおいえとうもせを かないらる主食学が ては前すいつおりる百七島を應のけ うてかかる付も 了。忠考之忠を得 いとてあようてるつきなとしあるか 如タっくまてたるさせあまいもかく あらいサーいゆると うるあいらなひ 3

るく構へて各根をあくりへ我君の書 時を用いさせなか水禄三年五月分川義 を招しるてまつるまをほの強したらし 幸は佐をももちてかいるいいちはは むまを選いかありる一切りるもず出馬 を多く集めて成 至う斯のあとくするは、核する事る さいは感あさりらもと親の作をかりふ といあら一年の安くおかりかさりよ来 あらむすをいてい軍用は事例あまりよ らゆめもひかく銭を接すいかあいらも此 り降むをつくして養育しるてありりし とて老眼は後を流しやけれい時知年よ を残るなけれなとであるとき え大高ばるるり九根館はのあばを核 中は一を出たろういるらせるまいまで ーを持てあきいも上の舒を接るもの おのとは我は十貫文つ、を望る積を だきょうてはまのかるありに年方は 東野官義えのなるよりて九根はを改る しる一様はちょうい いむと軍を三部するちあるかと去名 名を四方は信も世界 かるものありと

すいかかいりるしよりてかくあるをお

を見せばいらせ来年そても一り辿りの

るる 竹後はきたてまつりしとき思き動を助 你一て馬斯岳と利かえ亀三年三月二十 西國城里即通同記村の上園寺は八不思するれた年八十年法為幹例時成五 莫文布即果人立即某人、古云国崎传云 出のとき忠老及び松平勘心即代一答作 うちつてかのはをちらき年一向多修の 京館のはる去良義明ちからをで降をも

× 3

田は東氏の名の十世文の人の意思なれる

三宝香左出、改真力意

女な

母八某氏

ぬれーてから改真っるまとろう

母、某氏

忠宗

つ忠偏号織国信秀る太を通一号兵を引 唐忠明すっつへあてまろり 天正十六年 松事我人信考上和国的博臣村平三左出

接下て報電系は強奏まりな川氏真山日本多方助信後っちるあの一宮の後 の役は後ひたておつり我切を向も十二 と時料神のときは多一で作ると遠面 ちまを攻ないかときたるらいあてあり 回は你出述あり大島はるのであれをち めて御馬を出す小寺都のはる鈴木田向 東照公子近传专时最水流之年二月之 府なまろうて らせたおいのとき徒軍のかるあり七年 軍三年五日今川最見り接告了一个尾路 天文八年三万国海万内五生了二十年後

李简 意伯 東の為は行きて死失法為雪心 出家一下通同地村上部ちの便職とから 母、某氏 四日は出路一信者省と我ひれ平清岳忠 てる時もを飲いむとも九月二十八次

一度 日本 東氏 出家一丁道目に村上部 一方方字 一方道目に村上部

突丁出勇致 すり進っては上は降もよのときは方の 动 Va 5 日幕不及 較をすえと真然の以るを、てる一向も て勇を信て防き私ひ 活て急ょ かんと H 七之思答三十两 内勝板震石はを繋すむと二万作勝を り去あを被いまらといく の矢 るなもってをかって 改长 い漫 るあ 浩 も 一は見を追すらい夫ひ二年 九月大 りかる 13 たろて はず いりるの以のは属 創 面 きょより見付の 13 信云为梅 の特別 村 日を をから ともえ生省 5 を考り社 え思你を からか 中かけ 的天乾 府

神能 分川家の唐 年三月遠 忠省武国力先龄小 を前屯三年十二月三方名合 び省とおあ 忠大顶好五 り上て中 ける競い来りますの法軍されらるめる て追嗣するりきとも込 けてさいを取り信言の の役 をけて首級を獲ちうえ鬼之年六日 るるちありひるてあつりれ 唐 1/2 方の治 各枚艘 國樹 しくれをらけたまり見る 即方出一康高排至山平大康 川事を 四回 を乾 の記 R 告出信徒 海本のあるりま 小葉が塚の凌よ いむくちはるえ たるか 力大軍法中国 孙 のときえ ら降を のとすり

田、茅氏 松平大陽官重勝力室

きたち

東路管は年仕一軍造とかり到場は出む そり武国家の軍的土を太忠つ直村の陣 おとる切をあらかとえ見三年十二月二 田は某氏 まむらひ新井中坂すをつてを軍を敗る 十一ら三方面の合致は作候をうけたは 心即左出(

孫大人母的残者忠職ら家長とある 土岐山博君是改了它 あつめるるは、ちょいから大久保安整 よっておれを補も ち思真りきころるとあるの影を系图 と唐の書は送ちま載て若しようて家す あっちるまけっ君を碎く直村馬よりお つける歌兵襲ひまりぬるむれらるたる

サる